職務体験記

【募集職種】消防職

私は、小学生の頃から消防士になりたいと決めていて、高校卒業後に消防士の試験を受けました。私が消防士になりたかった理由は、幼いころからの憧れだったという事もありましたが、生まれ育ってきた幸田町のために、体を使って何か恩返しがしたいと思ったからです。

消防士になって最初の難関は、半年間にわたる消防学校での初任科生活だと聞いていましたが、最近では昔よりも厳しくないという噂を耳にしていたので安易な気持ちで入校日を迎えました。しかし、実際は違いました。制服のシワや靴の汚れで長時間教官に怒鳴るように叱られ、厳しい訓練に加え、真夏の炎天下で更に追い込まれました。もちろん毎日頭がパンクする程の座学や沢山のテストもありました。その中で、何度も辛く辞めたいと思うことも沢山ありましたが、その様な時に支えとなったのが共に訓練や生活をする仲間でした。仲間の支えがなければ、決して乗り越えることができませんでした。また、このような厳しい生活を乗り越えなければ、人を助ける事ができず、自分の命も危うくしてしまうのだと感じる事もできました。消防学校での専門的な教育は初任科だけではなく、救急車に乗るための資格を取る救急科、救助隊員としての技術を学ぶ救助科など、学びに行かせてもらうチャンスは沢山あることが分かりました。しかし、全員が行けるわけではありません。署内での日頃の勤務態度、学ぼうとする姿勢、全てを考慮した中で選抜して行かせてもらえるのです。自分が頑張れば更に知識を増やすチャンスが与えられ、やる気が無ければどんどん後回しにされ、後輩にも追い抜かれてしまいます。それだけシビアな世界ではありますが、努力次第では先輩に追いつき、追い抜く事もできます。

また、実際に働いてみて分かった事は、自分の思い描いている消防士像と実際の消防士像には違いがあることです。

私は、消防士は、いつ起こるか分からない災害に備えて日頃から体力錬成や、訓練に励んでおり、常に体を動かす仕事だと思っていました。しかし、仕事の多くはパソコンで事務処理をし、書類の整理をする事がかなり多くとても驚きました。デスクワークを専門とし、24時間勤務ではなく、日勤で勤務している職員も幸田消防では全体の半分ほどいる事にとっても衝撃を受けました。また、夜間に仮眠時間がありますが、いつ指令がかかるか分からず、緊張感があるなかで寝ることはなかなかできず、休みの日には体が疲れており、1日中寝ている日も多くありました。

消防士という仕事が他の仕事と大きく違うことは、職員全員に細かく階級が振り分け

られており、下の階級の者は、上の階級の者の言う事を絶対に聞かなければならないということです。そのような事を聞くと、「もしかしたら上司の無理な要求によるパワハラがあるのではないか」と考える人もいるかと思います。私が体験した中では、そのような事はありません。しかし、自分の命や隊員の命、要救助者の命を危険にさらしてしまうような行動を取った時には、厳しく指導をされて落ち込む事もあります。それを単にパワハラと捉えてしまうのではなく、次は同じ事をしないように頑張ろうと思えるかどうかで、消防士として成長できるかが、変わってくるのだらうと思います。

これまでの話で、毎日が辛く、厳しい職場だと不安に思ってしまうますが、楽しい一面もあります。

7月に開催される救助技術大会では、各消防本部が様々な種目で頂点を競います。若手の職員は、積極的に出させていただきますが、1番を取るという事は簡単ではありません。なので、各グループやチームで試行錯誤する事は、とても楽しく、やりがいがあります。それだけではなく、年に3回はグループ内での飲み会があり、公務員らしく節度をもって楽しむことができます。休日には、趣味の合う先輩と出かけたり、悩みを聞いてもらうべく、一緒にご飯を食べに行ったりする事もあります。そのような中で、お互いを信頼できる良いチームワークが築けていけるのだらうと思います。

最後になりますが、私は、中学生の頃から「我夢謝羅」という言葉を大切にしています。この言葉には、「自分の夢のために、全ての物、事に感謝をし、沢山のひとと羅列していけ」という意味が込められています。消防士という仕事は、いざという時に頼りにされる職種ですが、公務員なので周りの目も当然厳しいです。初めは、物事が上手く行かず、悔しい時や歯痒い気持ちになる事もあるはずですが。そのような時に、物事を投げ出し、逃げるのではなく、明確な自分の目標や、夢を持ち、仕事ができることに感謝をし、先輩方を頼って問題を解決していけば良いのではないかと考えています。常に誰の為に仕事をしているのか考え、仲間と協力し、切磋琢磨して行く事が、住民の方の生命、身体、財産を守ることに繋がるのではないかと考えています。